

めぐみ

2025年 6月号

学校法人 聖公会北関東学園
認定こども園
初雁幼稚園
〒350-0057 川越市大手町 8-5
Tel 222-5385 Fax 228-5010

4月の記憶から…

ちゅうりっぷ組担当 山本 佳穂

祖父母にとって私は初孫です。父方の祖父母はもう天国へ旅立ちましたが、本当に可愛がってもらいました。妹や従兄弟たちには、ちょっと悪いなあと思うほど（笑）祖父母は、私にとって良き理解者であり、一番の味方です。私がどんな選択をしても「私が選んだ道だから」と尊重してくれます。私と母は性格がよく似ているため、私が小さいころは何かとぶつかりやすく、よく喧嘩をしていました。（決して仲が悪いわけではありません！）そのころの私の最後の台詞は決まって「おばあちゃん家に電話するから！」と、電話をかけて祖母になだめてもらっていました。今考えると、毎度かかってくる電話に祖母は困っていたことでしょう。いつでも味方でいてくれる祖父母と過ごす時間は、私にとって心地良いものです。母方の祖父母の家までは、車で約1時間ほど。時間ができた時には、ふらっと一人で遊びに行きます。何か楽しい出来事があったとき、嫌なことがあって落ち込んだときには、祖父母の元へ行きます。祖父母は、私の話をいつも嬉しそうに聞いてくれます。幼いころから「幼稚園の先生になりたい」と話していた私が、現在幼稚園の先生として働いていることを私よりも誰よりも、心の底から誇りに思ってくれています。

そんな大好きな祖父母ですが、祖父ももう 90 歳。元気だった祖父の面影が、最近はだんだんと小さく、弱々しく感じるようになりました。詩を読んだり、字を書いたりすることが大好きだったのですが、そんな姿も少なくなりました。祖父の何か活力になれることはないかなと思い、古風ですが時々、葉書を出すことにしました。しばらくしてから、祖母が選んだ葉書に祖父の字で返事が届きました。達筆で力強かった祖父の字は、以前よりも弱々しく見えたのですが、返事を書こうとしてくれたことにホッとし、嬉しくなりました。これからも大好きな祖父母と過ごす時間を大切にしたいと思っています。天国にいる父方の祖父母の存在も、私の心の支えです。今もずっと見守ってくれていると思います。強い味方が側にいると思うと、人は優しくもなれるし、強くもいられますね。祖父母が愛情をたくさん注ぎながら、いつでも私の味方でいてくれたように、私も子どもたちのホッとする居場所であり、どんなときでも子どもたちの強い味方でいたいと思います。



チャプレンのページ

パウロの宣教旅行



「パウロは、自費で借りた家に丸2年間住んで、訪問する者はだれかれとなく歓迎し、全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。」

(使徒言行録 第28章 30～31節)

新約聖書全27の書物の約半分、13の書物(手紙)は、パウロという人から発信された文書になっています。こうしたことからパウロは1世紀最大の宣教者と言われています。

パウロはもともとキリスト教に反対する人で、礼拝をささげている人たちを見つけると、ローマへの反逆を企てていたと決めつけ、牢役人に引き渡していました。ところがダマスコへ向かう途中、イエス様に会い、生き方が180度変えられて、キリスト教の宣教者となりました。生き方が180度変わったことから、この出来事をパウロの回心と呼んでいます。

回心したパウロは、地中海各地に3回にわたって宣教旅行を行いました。旅行といっても遊びに行くのではなく、イエス様のことをローマ世界に伝えるに行く困難な業でした。

1回目の宣教旅行は、比較的近いところで行われましたが、迫害が激しく、またパウロ自身が熱病にかかってしまい、困難の多い旅でした。

2回目の宣教旅行は、1回目に行ったところをもう一度訪ねるつもりで出かけましたが、途中でマケドニア人の幻に会います。幻はエーゲ海の向こうまで来てほしいと懇願していたのです。そこでパウロは、「これは神様からの命令である」と受け止め、コリントなどエーゲ海の向こう側まで行き、イエス様のことを伝えました。

3回目の宣教旅行は、2回目の宣教旅行をほぼ踏襲する形で行われましたが、旅の終わりにエルサレムへ行ったところ、キリスト教を迫害する人たちによって捕らえられ、裁判にかけられることになってしまいました。裁判は不当なもので、最初から自分の不利な判決をくだされることがわかっていたパウロは、やむを得ず上訴を申し出ます。上級の裁判はローマで行われることになっていたため、パウロは護送される形でローマへ行くことになりました。ローマはこれまで3回の宣教旅行で行ったところよりはるかに遠く、途中地中海で2週間にもおよび大嵐に遭遇するなど、命からがらの旅になりましたが、なんとかローマへ到着することができました。

使徒言行録の記事はローマで裁判を待っているところで終わっていますが、64年、時のローマ皇帝ネロがローマで起きた3日間続く大火事の責任をキリスト教徒になすりつけ、大迫害を行った際に、パウロも殉教したと言われています。パウロの遺骨は、ローマのバチカン市国にある、サンピエトロ大聖堂に埋骨されています。

真理のため、正義のために、パウロは命を惜しまず神様のために働き続けました。私たちが今、イエス様の教えや物語を学ぶことができるのは、パウロをはじめとする1世紀の宣教者たちのおかげであることを忘れないようにしたいものです。

(チャプレン 鈴木 伸明)

クラス の 窓



つくし組

おててギュッギュー♪

天気がいい日は積極的に戸外活動をおこない、散歩もたくさんの公園に行きます。虫を観察したり、植物が好きだったり、働く車を指差したり、すれ違う人たちに手を振ったり…毎日いろいろなことに興味津々です。

4月当初はバギーを2台使っていましたが、今は立ち乗りバギーのみで乗らない子は順番に保育者と手を繋いで歩いています。最近は子ども同士で手をつなぎ、短い距離を歩く機会を作っています。「この子たちは先月入園した子だね?」と勘違いしてしまうほどつなぎ始めからとてもじょうずで、手が離れたとしてもまた友だちの手をつなぎ直したり、立ち止まって「離れちゃったよ～」教えてくれます。

歩く中でさまざまな発見がありますが、何よりも食いつきがいいのが小石です。私たちは何気なく転がっている石にしか思いませんが、子どもたちは宝物を見つけたかのように「あっ!!」と目を見開き、大切に握りしめながら歩いています。季節が変わりまた新しい植物や生き物が出てきますが、これからも発見を楽しみながら散歩できたらいいと思います。

もも組

生き物に興味津々!

今年のもも組の個人マークは昆虫などの生き物です。絵本にカタツムリが出てくると、「〇ちゃんのカタツムリだ」、蝶が飛んでいると「〇ちゃんマークのちょうちょだよ♪」とみんな教えてくれるほど生き物に興味津々!部屋の壁面にもダンゴムシ、アリ、蝶々、テントウムシなどを貼って「虫を探しに行こう」と声を掛けるとやる気満々で歩き、広場に着くとすぐに探しに行きます。最初は漠然と地面を見ていましたが、葉っぱをめくったりアリの巣がたくさんある場所を伝えると小さくかがんでダンゴムシやアリを発見。つくし組のときは虫をつかむ加減がわからなかった子も、「ぎゅっと持ったらいけない」「踏んだらかわいそう」というのがわかってきて、以前よりもじょうずに捕まえることができるようになってきています。1人が見つけると「どこどこ」とぎゅうぎゅうになりながら1匹のダンゴムシが丸まる姿を見たり、枝でなめくじをツンツンしツノが出てきたり入っていく様子を素敵なりアクションを見せながら観察する子どもたち。夏になる前にたくさん春の生き物を探しにいこうね♪

ちゅうりっぷ組

どんどん世界を広げています!

幼稚園の生活に慣れてきたちゅうりっぷ組のみんな。それぞれが楽しいことを見つけたり、涙の数が減ったり、みんなの日々の歩みが嬉しい今日この頃です。そんなちゅうりっぷ組は、金曜日の教会礼拝に行く年中長組をいつも「いってらっしゃーい」と見送ります。お出かけに行くお兄さん、お姉さんをうらやましく見送るだけでなく、「自分たちも出かけてみよう!」とある日ちゅうりっぷ組で、手をつないで赤門を出発しました。初めてのお出かけは、見るものすべてに興味深く、あっちで立ち止まり、こっちでは道路中央にはみ出しと、付き添いの先生たちの両手両足を総動員して、歩きました。赤門から、黒門までの道のりが、長かったこと…!でも、そんな散歩も数を重ねるとじょうずに歩けるようになってきました。たんぼ組と手をつなぎ、中央公民館、浮島公園と歩いて行けるようになったのです。公民館では、虫探し、花摘み、石拾い、追いかけてこと、幼稚園とはまた違った楽しさを満喫することができました。幼稚園生活にさえ、ドキドキしていた子どもたちが、どんどん世界を広げていく姿は、頼もしい限り。これからもどんどんみんなの楽しい世界を広げていこうね!

たんぽぽ組

心を解き放たれて

たんぽぽ組に進級してから早2ヶ月。少し緊張気味だったみんなでしたが、最近はパワー溢れる元気な声が響き渡るようになりました。ある日の自由遊び。砂場で数人で山作りをしていると掘ったところが大きな穴に。「ここに川を作ろう」と穴に向けて川を作っていくAくん。「お水持ってきたよ」とどんどんと加わり素敵な川と池が出来上がりました。そして、水が溜まった穴にジャンプ!!裸足で生き生きと楽しむ姿が微笑ましかったです。

初夏を思わせるような日にはスプリングラーが登場!スプリングラーに挑んで行く子、水のトンネルを潜って楽しむ子、泥団子を作る子。遊びは無限大!園庭に「キャー」「冷たい」「気持ちいい」と元気な声が響き渡ります。楽しそうに遊んでいる姿を見て汚れるのが苦手な子も保育者と一緒に少しずつ楽しめるようになってきました。泥や水などの自然物で遊び、心を解き放たれ、そばには友だちがいる。この一年間、友だちとの時間をたくさん楽しみ、時にはぶつかり合い大きくなって欲しいと願っています。

すみれ組

すみれ鉄道博物館によろこそ!

5月の誕生会出し物はすみれ組の出番!年長になると出し物を話し合いで決めます。22人子ども同士で話し合うのは難しく、すぐに「これが良いと思う」と言う子がいれば、そうでない子もいます。みんなが納得し、「いいね」と思えるものはなんだろう、と考えながら話を進める担任は毎年この時間はドキドキします。その時、ある男の子が「鉄道博物館楽しかったよね」と呟きました。すると周りの子どもたちからも「電車のった」「(ジオラマで)動物見つけた」など、楽しかった思い出が溢れだします。それならば「すみれ鉄道博物館」をしようとなりました。子どもたち同士で相談し「それいいね」と共感し、「電車より踊りたい子もいてもいいよね」と思えるのも年長らしいなと感じました。

～あらすじ～5月生まれの友だちを電車に乗せた先はジオラマ展示場。かわいい動物たちがクイズを出してくれます。車掌たちがスタンプを押してくれたチケットで、「シンカンセン!プリキュア☆セブン!」のコンサートを見に行きます。プリキュアたちの踊りに楽しくなった子どもたちは…!

という、すみれ組ワールド詰まった出し物になりました。練習の時から「完璧を目指す」と気合い十分な子どもたちです。ドキドキする子には「一緒に頑張ろう」と助け合いで、すみれ組みんなで作りあげる舞台、乞うご期待です!

わが家のまど



(347) 苔テラリウムに挑戦！

たんぽぽ組 大川戸菜緒



ハンドメイド熱が引いて来たころ、部屋の中に緑がほしいと思い、以前から興味があった苔テラリウムを調べました。前に作ったことがあったけれどうまく育たず…。まずは本を買い、熟読し、育て方の知識を持って材料を買いに行きました。

お目当ての苔や気になるものを買って漁り、お会計で驚愕（笑）帰って早速作りました。考え出したら止まらず、ああでもない、こうでもない気づいたら3時間経ってようやく完成！苔は3種類（ホソバオキナゴケ、ヒノキゴケ、コツボゴケ）を1カップずつ買いましたが、意外とたっぷりだったので、さらに入れ物を買いました。

種類によって、乾燥がNGだったり、むしろ乾燥に強かったりといういろいろあります。同じ瓶の中で育てるには、ベストな条件を模索する必要がありました。瓶の蓋の隙間が少ないと湿気が多く、ホソバオキナゴケが好まない環境でした。そこで少し隙間を増やすと、あっという間にヒノキゴケ、コツボゴケが萎れだす。なら

ばと水やりの回数を増やすと、湿度が増しすぎてカビが生える…。カビの部分を取り取って薬剤をかけ…。そんなことを繰り返して早3ヶ月。ようやく落ち着きました。分かったことは、カビさえ生えなければ苔は意外と強いこと！これからは気楽に観察しながら育てて行きたいなと思いました。そして苔たちが落ち着いて来たことでアクセサリー熱も再燃！これからも子どもたちのようにいろいろと挑戦していきたいです★



今月の聖書のおはなし



☆ 6月6日 花の日礼拝

きれいな花を咲かせてくださる神さまの恵みに感謝し、各家庭から持ち寄った花を神様にお捧げします。礼拝後は、いつも私たちのために働いてくださる市役所と東京電力の方へ、子どもたちがお捧げた花を届けます。年長組が市役所へ、年中・少組が東京電力に行きます。

☆ 6月13日「バベルの塔」

創世記 11章 1～9

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していました。シンの地に住み着いた人々はみんな話し合い、天まで届く塔を作って有名になろうとしました。それを見ていた神様は、「みんな一つの言葉を話しているからこのようなことを企てたのだ。直ちに言葉を混乱させて、互いの言葉が聞き分けられないようにしてしまおう」と決め、そこにいた人々を全地に散らされました。

☆ 6月20日「アブラハムの召命とイサクの誕生」 創世記 12章 1～9、18章 1～15、21章 1～8

アブラハムと妻のサラには子どもがいませんでした。もう、だいぶ年老いていました。あるとき神様がアブラハムに現れて、サラに男の子が生まれることをお告げになりました。神様が約束されたとおりのサラは身ごもり、男の子を産みました。アブラハムは、その子をイサクと名づけました。この時アブラハムは100歳でした。月日が経ち、イサクは大きく成長しました。

☆ 6月27日「イサクをささげるアブラハム」

創世記 22章 1～14

神様はアブラハムに呼びかけ、「あなたの愛するイサクを連れて、モリヤの地へ行きなさい。私が命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい」と命じられました。アブラハムは神様に従いモリヤへ向かいました。薪を息子に背負わせ、自分は火と刃物を持ち、歩いていきました。そして、祭壇を築き、薪を並べ、その上に息子イサクを縛ってのせました。アブラハムが刃物を取り、イサクを屠ろうとしたとき、天の御使いが現れ「その子に手を下してはいけない」と告げられました。神様はアブラハムの信仰を試そうとしたのでした。